

~~~~~  
論 説  
~~~~~

「ソシアリチー」と近代日本の国際協力： 新渡戸稲造におけるキリスト教人格主義形成とその系譜*

湯 浅 拓 也**

はじめに

新渡戸稲造は敬虔なクエーカー派のキリスト者であり、その寛容さや慈悲深さから人格者としても高く評価され、教育者として知られている。新渡戸は、1906 年から第一高等学校校長を務め、「ソシアリチー (sociality)」として社交主義の風を吹き込み、多くの学生がこの新しい風に影響を受けた。この影響を受けた学生の多くは、自身の立身出世という関心だけではなく、社会的な問題関心から官僚や学者への道を進み、国際連盟の付属機関などを舞台に、近代日本における国際協力の担い手として活躍した。教え子たちが、日本における国際協力を率先してきた新渡戸と同じように国際協力の担い手として活躍する点は見過ごすことができないだろう。

いうまでもなく新渡戸は『武士道』の著者として知られているように、近代

* 本稿における引用文は全集に掲載のある場合、各全集より引用を行った。引用文中の〔……〕は省略を、〔 〕は引用者による補足を表している。原文において不自然な表現で原文のまま引用した場合には、ルビで〔ママ〕を付した。一部、くり返しを意味する踊り文字を通行の表記に改めた箇所がある。また、出典表示の煩雑さを避けるため、『新渡戸稲造全集』（教文館、1969-2001 年）の出版社と出版年を省略し、巻数と頁数を示すのみにした。また、本研究の一部は、青山学院大学アーリーイールド研究支援制度の支援によって行われた。

** 青山学院大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程国際政治学専攻。国際政治経済学会 2017 年 10 月 18 日受付、2018 年 1 月 17 日レフェリーの審査を経て掲載決定。

日本を代表する知識人である。1862年に、盛岡藩士であった新渡戸十次郎の三男として、盛岡に生まれた。1877年に札幌農学校入学、開拓使勤務などを経て、1884年からアメリカ・ドイツに留学した。帰国後、札幌農学校、台湾総督府などでの勤務の後に、第一高等学校校長を務めながら、東京帝国大学で植民政策講座や「米国憲法、歴史及び外交」講座（ヘボン講座）の担当者として活躍した。さまざまな分野において活躍した新渡戸であるが、日米交換教授¹⁾として、1911年にアメリカにおいて日本の理解を促進するため、全米各地で講演活動を行い、第一次世界大戦後は、国際連盟事務次長を務め、知的協力国際委員会（後のユネスコ）の設立に大きな役割を果たした点などから、国際交流や国際協力²⁾のパイオニアとして最も評価されている。

しかしながら、新渡戸による「ソシアリチー」の強調と、その基礎となったキリスト教人格主義、さらにはその延長線上にある教え子たちの国際協力という系譜についてはこれまで十分に検討されてこなかった。そこで本論文では、新渡戸の宗教的・道徳的な側面に改めて焦点を当てつつ、教え子たちに継承されていく「ソシアリチー」を彼はどのような意味で提唱したのか、また「ソシアリチー」が近代日本の対外関係という点ではどのような意味を持ち得たかについて明らかにしたい。

以下では、次のように議論を進めたい。第一節において、先行研究を踏まえ、本研究の視座として、新渡戸に始まるキリスト教人格主義の系譜について検討する意義について議論する。第二節では、「ソシアリチー」の原点となった札幌農学校からアメリカ留学までの学生時代を、キリスト教人格主義の形成という視点から分析する。第三節では、新渡戸の「ソシアリチー」の特質について明らかにし、近代日本の対外関係に対してどのような意味を持ち得たか検討したい。

1) カーネギー平和財団と渋沢栄一らの協力の下、日米友好関係を推し進めることを目的に実現した制度で、新渡戸は第1回交換教授に選ばれ、1911年に渡米、全米各地の大学で講演を行った。

2) 本論文では、「国際協力」は広く文化的・人道的分野など非政治的領域における国際的な協力活動のことを言う。

1. キリスト教人格主義という視点

(1) 先行研究の概況と問題点

これまで新渡戸に関する議論は、数多くなされてきたが、大別すればキリスト教研究と外交史の2つの分野において研究が進められてきた。

キリスト教研究では、キリスト者としての新渡戸に重点を置き、宣教師や御雇外国人たちの影響を含め西洋文明の中心をなしていたキリスト教を新渡戸がどのように受け入れたかに焦点が当てられてきた。具体的には、札幌農学校の教頭であったウィリアム・クラーク (William Smith Clark) の影響やそのキリスト教教育を含めて検討する研究を中心に進められ³⁾、新渡戸の信仰の特質について明らかにされてきた。代表的なものに松隈俊子『新渡戸稲造』(みすず書房, 1969年)、佐藤全弘『新渡戸稲造の信仰と理想』(教文館, 1985年)、ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造: 国際主義の開拓者』(中央大学出版会, 1992年)がある。しかし、新渡戸が取り組んだ国際協力と信仰や思想背景との関係性については十分に説明がなされていない。

一方、外交史では、新渡戸の植民政策論の専門家と国際連盟事務次長としての新渡戸について研究が進められてきた。まず、北岡伸一や酒井哲哉によって、新渡戸が東京帝国大学で担当していた植民政策論についての研究が進められ、新渡戸の二面性、つまり植民統治を専門とする帝国主義者と主権国家間の国際交流の担い手である国際主義者の側面が同一人物の中においていかに可能となったのか、東西文明調和論との関係で明らかにされてきた⁴⁾。国際連盟事務次長

3) 札幌農学校とキリスト教の関係性に焦点を当てた研究もなされている。例えば、大山綱夫「札幌農学校とキリスト教」北海道大学編『北大百年史(通説)』(ぎょうせい, 1982年), 550-564頁, 太田雄三『クラークの一年: 札幌農学校初任教頭の日本体験』(昭和堂, 1979年)などがある。

4) 北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」浅田喬二ほか編『岩波講座・近代日本と植民地(第4巻)統合と支配の論理』(岩波書店, 1993年), 179-203頁, 酒井哲哉「『帝国秩序』と『国際秩序』——植民政策学における媒介の論理」『岩波講座・『帝国』日本の学知(第1巻)『帝国』編成の系譜』(岩波書店, 2006年), 288-318頁。東西文明調和論は、日本の国民的使命を東西文明の調和に求める考え方であり、西洋文明と東洋文明を対峙させることで、西洋諸国に対しては文化相対主義といった理論で対等性を正当化し、アジア諸国に対しては日本の主導性を正当化する理論。

としての新渡戸に関しては、廣部泉や齋川貴嗣によって、知的協力国際委員会(後のユネスコ)の立ち上げに関して新渡戸が果たした役割に関する研究も進められてきた⁵⁾。こうした外交史研究では、外交文書や国際連盟の一次史料、新渡戸の言説を用いて実証的に検討がなされてきたが、新渡戸の信仰やその背景が十分に検討されていない。

このように、新渡戸に関する研究はキリスト教研究と外交史によって分断される形で研究が進められてきた。外交史における研究の進展に伴い、新渡戸が各分野においてどのような役割を果たしたのか理解が進展したが、新渡戸がどのように国際社会を捉えていたかという思想的背景については十分に理解が進んでいない。こうした問題意識の下、本論文では、近代日本の国際協力を支えた新渡戸の信仰・思想的背景に焦点を当て、「ソシアリチー」について統合的に議論したい。このように統合的に議論することで、数多いながらも分散的な新渡戸研究に対して、新たな一石を投じることができるものと考えている。

(2) 研究視座

本論文では、キリスト教研究と外交史研究において明らかにされてきた点を踏まえ、統合的に議論することで見えてくる教育者としての新渡戸にも注目している。

上で述べた通り、新渡戸は第一高等学校校長として、一高伝統の「護国のた

従来の研究では、二項対立的に議論されてきたが、1990年以降の研究では、国際主義とアジア主義が共振する言論空間に日本の対外論が位置づけられるようになった。この点については、Stefan Tanaka, *Japan's Orient: Rendering Pasts into History* (Berkeley: University of California Press, 1993) 参照のこと。

5) 廣部泉「国際連盟知的協力国際委員会の創設と新渡戸稲造」『北大文学研究科紀要』第121号、2007年2月、1-20頁、廣部泉「国際連盟知的協力国際委員会の委員選考過程と新渡戸稲造」『明治大学教養論集』第441号、2009年1月、39-53頁、齋川貴嗣「国際文化交流のナショナルリズム：戦前期日本における「学芸協力」事業を中心に」『次世代アジア論集』第1号、2008年3月、11-30頁、齋川貴嗣「国際文化交流における国家と知識人：国際連盟知的協力国際委員会の設立と新渡戸稲造」平野健一郎ほか編『国際文化関係史研究』（東京大学出版会、2013年）、431-453頁などがある。

めの籠城主義」に対して、「ソシアリチー」の重要性を説き、多くの学生たちの人格形成に積極的に関わった。そして、その多くが新渡戸と同じようにキリスト者となっただけでなく、近代日本の国際協力の担い手として活躍する人物となった。こうした人物の中には、川西実三（内務省）、田中耕太郎（内務省・学者）、南原繁（内務省・学者）、前田多門（内務省）がいる。先行研究の中には、彼らを社会派内務官僚として一連の社会政策を推進する官僚集団として評価する研究がある⁶⁾。しかし、新渡戸の教え子には内務官僚だけでなく、学者では高木八尺や矢内原忠雄、外交官では澤田廉三といった人物もいる。高木はヘボン講座、矢内原は植民政策講座を新渡戸から引き継いだ人物たちであり、新渡戸が参加していた太平洋問題調査会などを舞台に活躍した人物でもある。また、澤田は1920年代の国際政治や東アジア国際関係に関わる重要な会議であったパリ講和会議、ワシントン会議、北京関税会議の全てに出席し、会議外交のプロフェッショナルとして知られている外交官である⁷⁾。こうした人物も含め、広く新渡戸の教え子を捉え直せば、新渡戸の教え子を内務省の社会派官僚というよりも、「ソシアリチー」に影響を受けた国際協力の担い手たちとしてまとめることができるのではないか。

国際協力の担い手となった彼らはどのように新渡戸の「ソシアリチー」を受け止めていたか、新渡戸の教え子として名高い前田多門を例にすれば、その一端が明らかになる。前田は1909年に東京帝国大学を卒業すると、内務官僚としてのキャリアを始め、その後、東京市助役（1920-1923年）、国際労働理事会における政府代表（1923年-1926年）、東京朝日新聞社論説委員（1928-1938年）、ニューヨーク日本文化会館館長（1938年-1941年）、戦後には文部大臣（1945

6) 水谷三公『シリーズ日本の近代・官僚の風貌』（中央公論新社、2013年）、244-247頁。この他に、松井慎一郎「新渡戸・内村門下の社会派官僚について」『日本史研究』第495号、2003年11月、29-55頁、村松晋「川西實三の視座：新渡戸・内村門下の「社会派官僚」をめぐる一考察」『新渡戸稲造の世界』第25号、2016年、63-86頁等の研究がある。

7) 澤田廉三については、酒井哲哉「昭和の外交官の系譜：澤田廉三の軌跡」鳥取県公文書館編『澤田廉三と美喜の時代』（2010年）を参照のこと。

年-1946年)、ユネスコ総会政府代表(1951年、1952年、1958年)を務めた。また、日本太平洋問題調査会理事、日本ILO協会会長、日本ユネスコ国内委員会会長などを歴任した人物であり、新渡戸と同じクエーカー派のキリスト者でもある。前田の回顧録では、新渡戸から受けた教を以下のように振り返っている。

或る日、先生に、就職方針について伺ひに行つたところ、御託宣〔こたくせん〕は次の通りであった。日本に欠けてゐるものは社会教育である。君は、社会教育家になれ。しかし、その準備として、一時、官界に入り給へ。現在の日本では、何と言っても、官界は、社会の展望に最も便利の地位である。それには、内務省が良かろう。暫く、そこで世の中を見た後、民間で社会教育の仕事をやつたらば、とのことであつた〔……〕その頃、社会教育と言ふ言葉は、余り世間では通用しなかつた。一体、社会と言ふ文字は、一部の保守家には禁句でさへもあつたのである。しかし、新渡戸先生が、当時一高校長としてのみならず、それこそ、当代随一の社会教育家として、機会ある毎に強調されたのは、縦の関係の外に、横の関係を重視すべきこと、即ち、水平的に、各人が相寄り相携へて、善き社会を作らねばならぬ。日本人の教養はこれまで欠けて居り、こん後涵養〔ママ〕の急務なるを感ずるのは、社会性(ソーシアリチイ)であり、社会奉仕であるという点であつた⁸⁾。

この前田の回顧から考えれば、前田は新渡戸の教えの中でも「横の関係性」を重視していたことがわかる⁹⁾。ここでの「社会教育家」が具体的にどのような意味で使用されているか明らかではないが、「水平的に、各人が相寄り相携へて、善き社会を作らねばならぬ」という点は、1920年代から戦後にかけて、ジュネーブにてILO政府代表やニューヨーク日本文化会館館長、ユネスコ総会政府代表などを務め、一貫して国際協力に取り組んだ人物らしい言葉であろう。

8) 「道草の跡」『前田多門：その文・その人』(前田多門刊行会、1963年)、14頁。

9) 一般的に内務官僚は、国家的な価値を重視し、国内問題を主に対象としている。そのため、前田のように国際的な視点を有する人材が輩出される要因については土台となつた新渡戸の影響以外の要素(内務省内でのキャリアや国際連盟付属機関への派遣等)についても追加で検討が必要である。

前田の例にあるように、新渡戸の「ソシアリチー」が教え子たちへと継承され、国際協力や国際交流を担う人材となった点を考慮すれば、「ソシアリチー」は素朴な概念であるが、新渡戸とその後継者たちの取り組みを踏まえて検討すれば、これまで見えてこなかった近代日本の対外関係を明らかにすることができるのではないか。本論文では新渡戸の後継者たちを本格的に論じることではできなかったが、「ソシアリチー」は新渡戸だけでなく、後継者たちにも継承されたことを踏まえて、新渡戸と教え子たちを結びつけていた「ソシアリチー」という理念に沿って検討することが本研究の視座である。

2. 新渡戸におけるキリスト教人格主義の形成

この節では、新渡戸の学生時代を時系列に沿って、新渡戸が「ソシアリチー」を重視するキリスト教人格主義をどのように形成したか議論を進めていきたい。新渡戸は学生時代を、1877年から1881年の4年間を札幌農学校で、1884年から1887年の3年間をアメリカで過ごした¹⁰⁾。新渡戸の札幌農学校入学は、すでにクラークが札幌から離れた後のことであったが、クラークから影響を受けた一期生や外国人講師¹¹⁾から間接的にクラークの影響を受けたと考えられ、専門分野の勉強だけでなく、信仰的な問題にも深く考えながら過ごした4年間であった¹²⁾。また、アメリカでは革新主義の影響を強く受けたジョンズ・ホプキンス大学で学び、クエーカー派のキリスト者となったのもこの時期である。新渡戸の学生時代の経験は、キリスト教人格主義の形成における重要な契機であ

10) 新渡戸は、1887年からドイツに留学したが、札幌農学校助教に任命されてからのことであるため、本論では新渡戸の学生時代を札幌農学校とアメリカ留学として検討する。

11) ウィリアム S. クラークは、ウィリアム・ホイラー (William Wheeler) とデイビット・P. ペンハロー (David Pearce Penhallow) の2人のアシスタントとともに来日している。2人のアシスタントはクラークが札幌を離れてからも、教師として札幌に滞在した。ホイラーは1879年、ペンハローは1881年に札幌を去った。

12) 新渡戸は世俗的な名誉を追求する立身出世の願望と、キリスト教の説く道徳的価値観との間の宿命的な矛盾から、長時間図書館に引きこもるようになり、仲間から「モンク (修道僧)」というあだ名で呼ばれるようになった。(松隈前掲書『新渡戸稲造』, 80頁)

り、教え子たちにも受け継がれていく「ソシアリチー」の源流となったと考えられる。

(1) 札幌農学校の校風とキリスト教

札幌農学校は明治以降、数多く設立された官立専門学校のひとつであり、北海道開拓を担っていた開拓使によって、1872年、東京に設立された開拓使仮学校に起源を持つ高等農業教育機関である。開拓使による学校建設は「開拓に関する欧米技術導入政策の一環であり、開拓技術者、開拓使官吏養成」¹³⁾を目的として、北海道開拓のための技術を有する人材を短期間に育成することに重点が置かれていた。しかし、1876年に札幌農学校として、札幌の地にて再出発するときには、アメリカからマサチューセッツ農科大学の学長をつとめていたクラークが招かれた。クラークが主導的に作成した教育目標である「組織の方針」によれば、札幌農学校の教育目標は、以下の通りである。

“農学校”の目的は、学生をして、拓殖行政にあたり産業、特に農業に関する専門の化学部門、さらに天然資源と製造工場の開発、進歩した文明の維持に関し高度の理解力を持ち、かつ、実行有るはたらきができるよう訓練し、あわせて、国家と社会にたいするかれらの考えを高揚し、将来の地位にふさわしい教養を自主的にたかめさせるにある¹⁴⁾。

このように仮学校時代の目的であった北海道開拓のための技術者や指導者の養成を目的とした専門分野の教育に加え、「国家と社会にたいする考えを高揚」というように幅広く教養を自ら高めさせる必要性が説かれており、この点は開拓使仮学校時代に見られなかった点であり、この大きな教育方針の転換はクラークの着任によってなされたものである。

クラークはなぜ専門科目に加え幅広く教養を重視したのだろうか。小枝弘和

13) 北海道大学百年史編集室「第一章開拓使の設置と仮学校」『北海道大学百年史』(通史編)(ぎょうせい、1980年)、3頁。

14) 「札幌農学校」『新渡戸稲造全集』21巻、367頁。

の研究¹⁵⁾によれば、アメリカとドイツで教育を受けたことが大きく影響していることがわかる。クラークはアマースト大学でリベラルアーツカレッジの教養教育を受け、ピューリタニズムを自らの思想基盤とした。卒業後はドイツに留学し、ゲッティンゲン大学に入学した。当時のドイツの大学は、研究を大学の中心的な役割とする改革が進み、「学問の自由」が保障され、研究機関としての大学制度が確立した時代であり、大学設備や教授陣の時間的経済的優遇措置、学生に課せられる研究課題といった点からドイツの大学がアメリカの大学よりもはるかに優れた研究機関であったとされている¹⁶⁾。こうして、クラークはドイツの研究センターの大学とアメリカのリベラルアーツカレッジとの間に存在する違いを見出している。この違いから、クラークは獲得した知識を善用する規範としてのキリスト教、特にピューリタニズムに基づく道徳なしに最高の学問への到達はないと考えた。こうして異なる教育方針に触れたクラークは専門性を有する人材であっても、幅広い教養とキリスト教に基づく道徳を土台として形成する必要性にたどり着いた。

こうした経験を踏まえて、クラークは農学校であるにも拘わらず、専門科目とともに幅広くリベラルアーツ科目からなるカリキュラムを構成した。これは新渡戸が在学した時期の時間割を見てもわかるように¹⁷⁾、数学、化学、農学といった専門分野が時間割の大方を占めているが、語学（英語・日本語）や歴史、演説、経済学、軍事教練も含まれていた。実際に新渡戸自身、札幌農学校を農業の専門学校としては捉えていなかった。

私のやうに、やゝ技術を重んずる如き傾向がある農学校の教育を受けた

15) クラークの教育思想の形成については、小枝の研究に依った。小枝弘和「札幌農学校建学の理念——W・S・クラークの教育思想とその実践を中心に——」『北大百二十五年史』（論文・資料編）、3-53頁。

16) 吉見俊哉『大学とは何か』（中央公論新社、2011年）、78-90頁。

17) 新渡戸の時間割については、北海道大学編著『北大百年史 札幌農学校史料1』（ぎょうせい、1980年-1982年）所収史料〔道〇一八七九（ホイーラ二〇）〕、〔道〇二四五四（ホイーラ三四・三五）〕、〔道〇二四五四〕、〔道〇三〇九七〕、〔農一〇一〕、〔農一〇一（ブルックス五二）〕、〔道〇四五四八〕を参照のこと。新渡戸の第2年級第2期のみ史料存在せず。

ものでも、鋤や鍬や肥料のことだけで、他のことは考えないであるというわけに行かない。殊に、北海道の学校の如きは、農業の専門家を造るのが目的ではなかつた。今日でいへば拓殖学校とか、啓蒙学校とか、開拓学校とでもいふかも知れないが、その開拓といふのも、必ずしも土地ばかりの開拓ではない。人文の開拓といふ意味もあつたやうである。〔……〕開拓するには、何も農業のみに限つたことはない。道路も作らねばならぬ。道路は鋤鍬だけでは出来ない。測量もせねばならぬから、工学も必要になつて来る。その他、村を造れば学校も必要だ。学校は肥料ぢやなかなか成長しない。教育家も必要である。そういふわけで、あらゆる方面に活動する人材を養成するのが目的で、彼処に学校を造ろう、即ち新開地に必要な人物を造ろうといふのが、そもその目的であつた。〔……〕とても日本人には経営は出来まいといふことので、〔……〕クラークといふ人が選ばれたのである。ところが亜米利加は、あゝいふ大国であるから、農をもつて生活の基礎にするといふわけで、農に重きをおいたから、その通り北海道でも農業を開くことになつたのである。けれども、実際は、農学などは一週間に三時間か四時間位のもので、他は哲学とか、文学とか、わけのわからないやうなものを習つたものである¹⁸⁾。

さらに、農学以外の幅広い科目に加え、札幌農学校では課外活動として聖書を学ぶ日曜学校が開催されていた。クラークは学生たちの道德教育に聖書を用いることを開拓使長官であった黒田清隆に黙認させ、学生のために聖書を購入していた¹⁹⁾。この他にも、クラークは学生たちに「禁酒禁煙の誓約」に署名させ、煙草、アルコール飲料の使用を禁じ、賭け事、神を冒瀆することを禁止した。こうした宗教的活動から、クラークは聖書を道德規範として、積極的な禁欲生活を実施する生き方を学生に求め、離任前にはより直接的な「イエスを信ずる者の契約」に署名させ、学生たちに共に助け合いながら、信仰生活を送ることを約束させた²⁰⁾。

18) 「内観外望」『新渡戸稲造全集』第6巻、409-410頁。

19) 「農学校における聖書の使用許可」『札幌農学校資料』（明治9年、No. 219、クラーク M4-16）、「入学試験及び聖書三〇冊入手等の件」『札幌農学校資料』（明治9年、No. 173、クラーク M4-1）。

20) 札幌農学校一期生と二期生が中心となり、宗教上の意見の違いを超えて、1881年に札幌独立教会を設立するに至っている。

札幌農学校における新渡戸の生活については、その一部を『太田稲造保羅日記』から読み取ることができる²¹⁾。この日記は1879年8月7日からはじめられている約4ヶ月間の日記である。ここには、聖書やキリスト教関連の本を読んでも信仰が進まずに悩んでいる様子や「怒る事ナク平和ニ交リ、聖書ニ親シミ、父ノ光を見タリ」と霊的な体験が書かれている²²⁾。また、この日記から農業実習など農学に励んでいることもわかるが、信仰生活に関わる記述が多いことから、札幌農学校での生活における宗教的な問題がいかに大きな問題であったことは明らかである。

(2) 新渡戸が留学した時期のアメリカ

新渡戸は札幌農学校を卒業後、開拓使御用掛と東京大学専科生などを経て、アメリカに渡った。新渡戸がアメリカに留学した1884年は、19世紀末の革新主義の時代であった。この時代、アメリカはイギリスの工業生産額を追い抜こうとしている時代であり、アメリカ史上前例のない工業化、経済発展の時期であった。具体的に言えば、1879年から1999年の20年間に、製造業の総生産額が約19億6200万ドルから50億4400万ドル、GDPでは約1741億ドルから3134億ドルへと急拡大した時代であった²³⁾。こうした経済発展の一方で、都市が巨大化し、貧困層の都市への流入、犯罪・暴力といった都市における社会問題が大きな問題となった時代でもあった。特に工業化した巨大都市には貧しい労働者が暮らす移民外がいくつも形成され、貧困と罪惡の温床となり、都市の

21) 『太田稲造保羅日記』(1879年8月～12月)、新渡戸記念館所蔵(青森県十和田市)。一部は松隈前掲書『新渡戸稲造』に掲載されている。新渡戸は1869年に、叔父の太田時敏の養子となったが、1889年新渡戸家長男七郎の死去により新渡戸姓に復帰した。この『太田稲造保羅日記』以外の新渡戸の日記は公開されていない。日記に関しては、新渡戸こと子・赤石清悦「娘から見た新渡戸稲造夫妻」『芸芸広場』第30巻第9号、1982年9月、加藤武子「祖父の日記」『新渡戸稲造全集』別巻2、107-112頁に詳しい。

22) 『太田稲造保羅日記』、松隈前掲書『新渡戸稲造』、72頁にも転載されている。

23) Susan B. Carter, et al., eds., *Historical Statistics of the United States, Earliest Times to Present, Millennial Edition, Vol. 4* (New York: Cambridge University Press, 2006), p582; *Historical Statistics of the United States, Vol. 3*, pp. 24-25.

社会問題が深刻化していた。

こうした社会問題の深刻化とそれに対する革新主義の改革者たちの活動は何をもたらしただろうか。一般的に移民の国として知られているアメリカは、ヨーロッパ諸国で興隆した歴史的な神話とシンボルで結びつけられた民族的紐帯を有せず、自由、平等、民主主義といった普遍的理念を基盤としていることから、「アメリカ例外主義」として理解されてきた²⁴⁾。しかし、大量に流入する移民によって引き起こされた都市の問題や分断された社会秩序の再編が緊急の課題として認識され、社会改革に関わっていた知識人や活動家たちは、自由放任経済と所有者個人主義から成る形式的自由に批判的であった。アメリカの社会文化を研究してきた中野耕太郎は、この時代を「人々の市民的地位、すなわち、シティズンシップとその源泉たる平等概念に「社会的な」領域を見出す議論が現れたことは歴史的に重要であった²⁵⁾」と評している。つまり、この時代は、アメリカ的「自由」(財産の所有)と「個人の平等」(機会の平等)の原則が生んだ結果としての実質的不平等をどうするかが知識人たちの問題関心となっており、革新主義知識人たちは個人とアメリカ憲政の間に存在する「社会的な問題」を発見した時代であった。

まさに新渡戸が留学していたジョンズ・ホプキンス大学はこうした革新主義的な雰囲気が強い大学であった。ジョンズ・ホプキンス大学は、ボルティモアのクエーカー実業家であるジョンズ・ホプキンス (Johns Hopkins) の遺産によって1876年に設立された大学であり²⁶⁾、ドイツ国家学の影響の下、公共政策の専門家の輩出が目的とされていた。そのため、ジョンズ・ホプキンス大学は他の大学とは異なり、大学院教育を重視した大学として知られているように、新渡戸が留学した時代も、講義の形式よりも、ゼミナール形式での授業が中心で

24) Michel Kammen, "The Problem of American Exceptionalism: A Reconsideration", *American Quarterly*, Vol. 45, No. 1, March 1993.

25) 中野耕太郎『20世紀アメリカ国民秩序の形成』(名古屋大学出版会, 2015年), 39頁。

26) ジョンズ・ホプキンス大学の教育体制にどれほどクエーカーの影響が働いていたかは改めて検討が必要である。

あった²⁷⁾。また、新渡戸が指導を受けたハーバート・アダムズ (Herbert Baxter Adams) やリチャード・イーリー (Richard Theodore Ely) はドイツで留学を経験し、アメリカ革新主義の特徴である形式的な国家制度に対して批判的であり、社会の実情や慣習から捉え直そうとする関心を有している研究者たちであった。特にイーリーは「社会的連帯 (social solidarity)」という言葉を使用して、アメリカの個人主義を超える価値として「社会的連帯」を位置づけ、以下のように述べている。

社会的連帯が意味するところは、人間の利害がひとつであること、良くも悪くも人は互いに頼り合っていること、すなわち、我々の真の繁栄が純粋に個人的なものではなく、同様に社会的なもの (social affairs) であることだ。つまり、我々の幸福と繁栄は、常に共通の福祉としてしかありえないのだ²⁸⁾

このように「社会的連帯」を位置づけたイーリーにとっては社会経済問題に政府が介入しないことは時代遅れであり、社会問題を解決するためには、教会や国家そして科学が協力して努力する必要があることを主張した²⁹⁾。こうした問題意識を有していたイーリーはイギリス古典派経済学に対して批判的な視点を持ち込み、講義を行っていた。イーリーの授業の様子を新渡戸は以下のように、振り返っていることも納得できる。

日本ではスペンサーの書物を読めば唯棒読にスースーと読んで、何処が彼の説の殊更に好い所やら、どこが誤つて居るやら其辺の判断なく、唯スペンサーの云う儘(まま)に成程成程と丸呑みする、[……] 然るにイーリー

27) 留学中の新渡戸については、Jun Furuya, “Nitobe Inazo in Baltimore: A Graduate Student and Quaker”, *The Journal of International Studies* (Institute of International Relations, Sophia University) No. 15, July 1985, pp43-71. 大樞敬史「新渡戸稲造の米国留学時代における農学研究に関する実証研究: ジョーンズ・ホプキンス大学所蔵文書の分析を中心として」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第101号, 55-67頁を参照のこと。

28) Richard T. Ely, *The Social Law of Service* (Eaton&Mains, 1896), pp127-128.

29) Richard T. Ely, “Recent American Socialism,” *Johns Hopkins Studies in History and Political Science* 4 (1885), pp72-74.

の遣り方を見ると例へば社会学でいへば、スペンサーは斯う云ふけれ共此事実は大いに間違て居るとか、此議論の根柢が誤つて居るとか、〔……〕それ相応の判断を以て一々批評的に読んで行くのである³⁰⁾

このようにジョンズ・ホプキンス大学において、イーリーの授業の様子を窺い知ることはできるが、具体的な議論において、新渡戸がどれほど影響を受けたかは明らかではない。しかし、新渡戸が早稲田大学で行った講演をまとめて出版された『内外展望』には「都会病」として、ロンドン、パリと並んでニューヨーク、フィラデルフィア、シカゴなどの都市を挙げ、資本主義の弊害について厳しく指摘している³¹⁾。こうした点からも、新渡戸が社会的な問題に対する理解を有していたことは明らかである。

(3) クエーカーとの出会い

アメリカに渡った新渡戸であったが、ジョンズ・ホプキンス大学では小さな祈祷会が開かれる程度で、札幌農学校の宗教的な雰囲気の中で過ごした新渡戸にとっては満足できるものではなかった。こうした状況で新渡戸はクエーカーと出会うこととなる。留学してしばらく、新渡戸はさまざまな宗派の集會に出席したが、どの集會にも馴染めずにいた。しかし、クエーカーの集會を目にしたときに、その簡素さなどにひかれ、集會に出席するようになり、1886年12月に正式にボルティモア月会³²⁾の會員として受け入れられた³³⁾。クエーカーと出会ったときの印象を新渡戸に語らせれば、以下の通りである。

〔クエーカーの集會の印象として〕其建築と云ひ、内の体裁と云ひ設備裝飾——否、寧ろ無裝飾——悉く十七世紀の絵で見たやう。中には若い婦

30) 「帰雁の蘆」『新渡戸稲造全集』第6巻、83頁。

31) 「内外展望」『新渡戸稲造全集』第6巻、337-352頁。

32) クエーカーの基本となる集會の一つ。月会は主に礼拜會と事務會を開催する。月會のレベルを超える活動を調整する集會を年會と呼んでいる。

33) クエーカーに引き込まれた背景には、クエーカー派キリスト者であり、日本人留學生の世話をしていたウイスター・モリス (Wister Morris) の影響も大きいと考えられる。

人も許多居たが、華美な着物は一枚も見えない、帽子に花を着けた者^{〔など〕}は更がない、ソレに説教する演壇もない、賛美歌もない、三百人許りの信徒が、座禪を組むが如くに唯端然として黙座し、折りに精霊に感じた人あれば、誰でも立つて、二三分、長いので二十分も感話を述べる。〔……〕其後も屢々会堂に行き、又宗派の人にも交はつたが、感服する事が多い、就中事を議するに当りて唯々頭数を算へて多数決^{〔など〕}採はしない、其代り之に与かる人、即ち説を述ぶる者の人物の軽重^{〔など〕}を計って採決するが如き、又牧師を定めず、況んや俸給を遣つて雇ふ採はせざる如き、水を以て洗礼を施さない事の如き、集会は黙座瞑想を主とし、各自直接神霊と交はるを以て礼拝とする如き、頗る僕の気に入った³⁴⁾。

そもそもクエーカーは17世紀末にジョージ・フォックスを始祖とするプロテスタントの一派である。クエーカーは人種や階級、性別の区別なく、万人に宿る「内なる光 (Inner Light)」を自らの拠り所とする信仰である。そして、クエーカーはこの「内なる光」を体験するために独自の礼拝形式をとる。具体的に言えば、一般的なプロテスタントの礼拝が説教を中心とする形式であるが、クエーカーは各自が沈黙のうちに神の生命に触れるという体験を中心としている。そのため、クエーカーの礼拝は儀式的なものは排除し、職業的聖職者も置かないといった特徴を有しており、クエーカーにとっては礼拝のための簡素な場が必要とされるだけである。こうしたクエーカーの「内なる光」に対する考えは、普遍的な人類の平等、そして普遍的な救済論が導かれるのであるが、この点については新渡戸の信仰理解に重ね合わせてみていきたい。

まず「内なる光」の理解について、新渡戸によれば、以下の通りである。

人間には男でも女でも、貴きにも賤しきにも、又既に子供にも、フォックスの言ふやうに、その心に種子が植ゑつけられて居る。良心本心に基督の種があつて、之を育てれば、即ち善を好み悪を憎むの観念、神を畏れるの観念となる³⁵⁾。

34) 「帰雁の蘆」『新渡戸稲造全集』第6巻、138-139頁。

35) 「人生雑感」『新渡戸稲造全集』第10巻、146-147頁。

このように新渡戸は「内なる光」を通して、人種、性別等の区別なく平等に「内なる光」が宿ることとしている。この「内なる光」に対する印象からクエーカーはスピリチュアルなものである印象を受けるが、一方で実践を重視する信仰でもあった。

そこで宗教とは何ぞやと問へば、私の答へは神に接して力を得、之れを消化し同化して、現はす力であると云はねばならぬ。宗教の奥義は説きが難く又考へ難い。学説や理論は此の事に就ては何の用をもなさぬ。唯朝夕の祈禱に於て、神に近づき、神に交はり、神の力を心の実験して、之れを身に顕はす様にすのが何より肝要の事である、宗教を研究するのは実行に於てするの外は無いから、聊^(いささ)か此の事を諸君の前に述べて、吾人が神より受けた恩恵を同胞兄弟の間に^(わか)頒つ様に致したく思ふのである³⁶⁾。

上のような新渡戸のクエーカー理解から、新渡戸にとっての信仰は、学説や理論よりも、祈りと実践を通して、信仰の道を歩むことを重視していることがわかる。つまり、「内なる光」からは人類の平等が導き出されるだけでなく、「内なる光」を育てていこうとする社会的実践までを含むという点に新渡戸の信仰があった。新渡戸がフィラデルフィアのクエーカーたちの日本への伝道と女学校建設に対して助言を送るなど協力していたこと³⁷⁾、また帰国後の新渡戸が恵まれない子女のための学校である遠友夜学校の運営やいくつもの女学校の経営³⁸⁾にも深く関わっていたことも、「内なる光」の信仰によるものであると考えられる。

36) 「宗教とは何ぞや」『新渡戸稲造全集』第10巻、21頁。

37) 新渡戸の助言は、新渡戸稲造「米國クエーカル宗徒日本に女学校建設せんとする議」(『女学雑誌』1887年10月)に見ることができる。

38) スミス女学院(現在の北星学園)、東京英学塾(現在の津田塾大学)、東京女子大学など新渡戸は数多くの女学校経営に携わった。

3. 「ソシアリチー」重視のキリスト教人格主義

(1) 新渡戸における「ソシアリチー」とその評価

ここまで新渡戸の学生時代について検討を加えてきた。これら議論を踏まえて考えれば、新渡戸の「ソシアリチー」をどのように評価することができるだろうか。結論を先取りして言えば、筆者は新渡戸の「ソシアリチー」を重視したキリスト教人格主義は他者や社会に働きかける「横の関係性」を重視するものであったと考えている。

新渡戸のキリスト教人格主義は札幌農学校における幅広い教養教育とキリスト教教育を土台にして形成されたことは前節で述べた通りである。札幌農学校における教育内容や新渡戸の言説から考えれば、札幌農学校で学んだキリスト教人格主義は具体的な問題関心を有する考え方というよりも、キリスト教信仰に裏付けされた道徳的価値観や知を善用する規範といった概念であった。そのため、新渡戸はアメリカ留学を通して、キリスト教人格主義の中でも「ソシアリチー」の重要性を導き出し、「横の関係性」つまり社会的な問題に働きかける重要性を痛感した。この背景には革新主義の「社会的なもの」に対する視点とクエーカー派の「内なる光」の考え方があった。そして、両者は革新主義の要素とクエーカー派の要素は無関係に並列していたのではなく、新渡戸の「ソシアリチー」は両者の相互作用を通して形成されていたと考えられる。なぜならば、新渡戸はジョンズ・ホプキンス大学で革新主義的な議論に触れたが、学者として学界にとどまるのではなく、国際交流の担い手として世界各地で講演し、また国際連盟事務次長として知的協力国際委員会の立ち上げに携わるなど国際協力を率先して取り組んだ。また、「宗教を研究するのは実行に於てするの外は無い」という新渡戸の言葉からもわかるように、積極的に社会と関わりを持つことによって、新渡戸はキリスト者としての信仰を深めていったのである。

確かに「ソシアリチー」を重視した新渡戸は国際連盟や日米交換教授として活躍した。そして、教え子たちが「ソシアリチー」を継承したことから考えても、近代日本の国際協力を検討する上において、重要な概念の一つであると言えるだろう。そうであるにも関わらず、「ソシアリチー」が近代日本外交史や国

際関係史では、十分に検討されてこなかった。注目されてこなかった理由には時代背景の問題があるだろう。新渡戸が国際連盟事務次長として活躍した1920年代は、第一次世界大戦の惨状を踏まえ国際主義が大きく進展した時代であった。しかし、1930年代は、日本国内では軍部の発言力が大きくなる時代であり、国際連盟が築いてきた国際協力が行き詰まりを迎える時代であった。こうした流れに対して、道徳的側面が強い新渡戸の「ソシアリチー」は対峙する術を持たなかった。新渡戸が亡くなる直前に行った太平洋会議でのスピーチ³⁹⁾には次のようにある。

[国際社会を不安に陥れている原因の一つとして「不寛容さ」を例に挙げて]人類の歴史の中で寛容が占めた地位は、いくら高く評価してもしすぎることはない。それは、すべての進歩と人類の幸福の根源に深く横たわっているのである。文明そのものが、その発展の過程で、この寛容の精神に負うところは甚大である。[……]自己保存の必要性から、ある国家がその市民の個人的な自由に対して厳しい態度を取らざるを得ないことが、しばしばあったのは事実である。そしてまた現在、至るところで進行中の目ざましい経済的変動のために、人々は経済的な安定を優先して考えざるをえないようになっており、個人的な自由は二の次になっているのもまた事実である。[……]こうした無慈悲な抑圧を受けねばならぬ正当な理由はどこにもないように思われる。無知から生まれる不寛容の暗黒な勢力と戦い、寛容の遺産を擁護することは、人類にとっての最も高貴な行為として価値がある[……]この地球上の全世界の人々が親密に接触することにより、いつの日か、ゆっくりとではあっても、激情ではなくて理性が、自己の利益ではなくて正義が、全世界の民族と国家のための仲裁人となる日が来ることを希望するのは、過大な望みというものであろうか？⁴⁰⁾

このスピーチの中にあるように、新渡戸は「不寛容の暗黒な勢力」と戦っていた。そして、この「暗黒な勢力」に立ち向かうために「人々が親密に接触す

39) 1933年8月14日、第5回太平洋会議・開会晩餐会にて新渡戸が行った演説。

40) 「日本文化の講義」(付録A I)『新渡戸稲造全集』第19巻、369-373頁。

ること」の重要性を主張している点は、まさに第一高等学校で学生に「ソシアリチー」の重要性を説いているかのようなものである。しかし、1930年代から終戦までの時代を検討すれば、「ソシアリチー」は「暗黒な勢力」の中に埋没したと言わざるを得ない。実際に、1930年代後半から終戦までの間は、前田がニューヨーク日本文化会館で館長を務めた以外に、国際協力を携わった人物を見出すことは難しい。しかし、戦後、前田が文部大臣として民主主義再建や国際社会復帰の契機となったユネスコ加盟⁴¹⁾において大きな役割を果たしたこと、東京大学で矢内原が植民政策論を国際経済論として読み替え、戦後の対外関係の学知を築いていったことを考えれば、全体主義に完全に敗北したのではなく、陰に身を潜めながらも、戦後へと引き継がれたと考えるべきであろう。道徳的側面が強い新渡戸の「ソシアリチー」であるが、近代日本の対外関係を検討する上で一つの重要な概念となり得るのではないだろうか。

(2) 「ソシアリチー」と対外関係の学知

上で述べた「ソシアリチー」と特徴と関連して、「ソシアリチー」は近代日本の対外関係の学知に対しても重要な視点をもたらしていたと考えられる。

新渡戸が東京帝大で担当した植民政策講座は、帝国内秩序に関する議論を対象としており、主に帝国間関係を分析対象とした国際法学、外交史などとともに、近代日本の対外関係を扱う学知の一つであった。19世紀末には、国際法学や外交史が主権国家を主なアクターとした権力政治を分析する学問として確立されるが、一方の植民政策学はその視点が大きく異なる学問であった。植民政策学は一見すると、植民地統治の学問に捉えがちであるが、実際には帝国統治に関する議論に終始する「縦の関係」ではなく、帝国主義の実証的研究や帝国主義に対する批判的検討を含んでいたことから、人・民族などの社会集団・国家・国家間組織などさまざまなアクターを含めた「横の関係」を分析する学

41) この点については、潘亮「占領下の日本の対外文化政策と国際文化組織：ユネスコ運動を中心に」『国際政治』第125号、2001年5月、185-205頁、澤田節蔵『澤田節蔵回想録：一外交官の生涯』（有斐閣、1985年）、266-267頁参照のこと。

問として発展した⁴²⁾。このように植民政学が国際法学や外交史とは異なる発展を遂げた背景には、パイオニアである新渡戸の影響が大きいだろう。

本論文が分析対象としてきた19世紀末から20世紀前半は「戦争の歴史」として論じられることが多く、第一次世界大戦や第二次世界大戦の起源といった戦争や外交に焦点を当てられることが一般的である。しかし、「戦争の歴史」の裏舞台では、国際主義が発展し、文化、労働、保健衛生といった社会的な問題に関して国際的な協調が進展した時代でもあった⁴³⁾。特に第一次世界大戦後には国際連盟が成立し、新渡戸は事務次長に就任し、知的協力委員会の設立に携わり、学芸協力という分野において大きく功績を残した。

新渡戸が東京帝国大学で主に担当した科目は植民政学論であり、植民政学論がどのような役割を果たしたか検討することは重要な視点ではあるが、キリスト者としての新渡戸に焦点を当てて考えれば、新渡戸の学問の思想的背景にある「ソシアリチー」が対外関係の学知に与えた影響も見過ごすことの出来ない問題だろう。

おわりに

本論文は、新渡戸の札幌農学校時代からアメリカ留学における、キリスト教人格主義の形成という視点から、新渡戸の「ソシアリチー」について検討してきた。新渡戸の学生時代を踏まえ、本論文では「ソシアリチー」は「横の関係性」を重視し、また実践的な性格を有するものであるという点を明らかにすることができた。この性格は、形式的「平等」という個の独立に止まる概念ではなく、積極的な交流や相互作用を求める概念であり、国際交流や文化政策といっ

42) 山影進「日本における国際政治研究の100年」国際法学会編『日本と国際法の100年 ①国際社会の法と政治』（三省堂、2001年）、261-289頁。矢内原忠雄の植民政学の基本書である『植民及植民政学』（有斐閣、1926年）では、植民の概念を政治的権力関係ではなく、植民・移民を含め、幅広く人の移動を分析する枠組みとして「実質的植民」の概念が提示された。

43) 入江昭、篠原初枝訳『グローバル・コミュニティ：国際機関・NGOがつくる世界』（早稲田大学出版部、2006年）、17頁。

た問題と距離が近いものであった。新渡戸の国際協力や国際交流に「ソシアリチー」といった思想的背景があったことは一般的であるように見えるが、これまでの新渡戸研究では十分に検討されてこなかった。新渡戸のキリスト教人格主義の形成を踏まえつつ、「ソシアリチー」を重視するに至った経緯を明らかにすることができたことは、本論文のオリジナルな点と言えるだろう。

本論文では、主に新渡戸に焦点を当てていたため、新渡戸の教え子たちについて議論することができなかった。前節で述べたように、新渡戸の「ソシアリチー」は近代日本の国際協力の思想的背景であり、対外関係の学知にも影響を与えたと考えられる。新渡戸の教え子たちがどのように「ソシアリチー」を発展させていくかについて検討することが、今後の課題となるだろう。

[謝辞]

本論文の執筆にあたって、新渡戸記念館（青森県十和田市）の新渡戸明氏、新渡戸常憲氏、角田美恵子氏より、新渡戸稲造の史料について、ご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げます。